

## Esmé のために書くことの意味

新田 玲子

1950年に *New Yorker* に発表され、53年に *Nine Stories* の中に収録された、“For Esmé—With Love and Squalor” は、Esmé の結婚式に行けない語り手が結婚の贈り物として書いたことになっており、前半は、戦争中のイギリスにおける Esmé との出会いと短い会話、後半は、自分のために愛と汚辱に関する物語を書いて欲しいという Esmé の頼みに答えて書かれた、Staff Sergeant X の話からなっている。この物語は、これまでほとんどの批評家が Salinger の短編の中でも特に優れたものであると賞賛してきたが、物語の総体的な理解に関しては、戦争という汚辱に対して Esmé が愛のシンボルであるという意見から、表面的に可愛い Esmé が汚辱の具現者であるという意見まで、解釈が実に様々である。しかも、今までに出された多くの批評を踏まえて、1988年に改訂された Warren French 氏の新しい批評書においてさえ、“Her story is one of the rare ones of the victory of the ‘nice’ world over the ‘phony.’”<sup>(1)</sup> と、愛と汚辱、善と悪、の単純な対比で捉えられているにすぎない。しかし、“nice” と “phony” の混在は、Esmé の性質はもとより、語り手自身や、弟 Charles、周辺の人物達の性格に至るまで、様々なところに窺われ、French 氏の解釈はあまりに単純すぎる感を免れないのである。

そこで拙論では、語り手と Esmé の性格を明確にし、Esmé の弟 Charles の役割や、後半の物語で語り手が Staff Sergeant X と名を伏した理由、また、Esmé が X に送った時計が壊れていたことの意味など、これまで十分に検討されてこなかった問題点を、総合的に考察して、語り手にとって忘れがたい少女となった Esmé の魅力はどこにあるのか、この物語を書くことの本当の意味は何だったのかを、探ってみたいと思う。

### 1 孤独の本質

前半の物語はDデイの直前という設定であるから、上陸作戦の特別訓練を終えたばかりの語り手は、死の可能性を意識しているに違いない。しかし、死についての不安や恐怖について理解を示してくれたり、話しあおうとしたりする者は、彼の回りには一人もいない。寒々とした心を象徴するような雨の中、語り手は町に出て、教会で聖歌隊の練習をしている Esmé を見かける。そして練習の後、語り手が喫茶店でお茶を飲んでいると、乳母と弟と共に後からやってきた Esmé は、語り手の孤独を感じ取って、わざわざ話をしにやってくる。語り手は Esmé が来てくれたことを心から喜ぶが、その気持ちをあからさまに打ち明けることはできない。

When I was seated, I couldn't think of anything to say, though. I smiled again, still keeping my coal-black filling under concealment. I remarked that it was certainly a

terrible day out.

“Yes; quite,” said my guest, in the clear, unmistakable voice of a small-talk detester.<sup>(2)</sup>

結局、齒のかぶせのような外見の醜さを気にしたり、あたりさわりのない天気を話題にしてしまう語り手の態度が、続く Esmé のそっけないが率直な返事と対象的で、語り手は心と心の触れ合いを望みながらも、素直に心をさらけ出した付き合いができないであることを強調している。

語り手が Esmé のように率直になれないのは、彼女の批判的な言葉をたしなめる場面に窺われる、鋭い感受性と相手に対する思いやりに関係付けられるかもしれない。

“Well. Most of the Americans I’ve seen act like animals. They’re forever punching one another about, and insulting everyone ... . One of them threw an empty whiskey bottle through my aunt’s window. Fortunately, the window was open. But does that sound very intelligent to you?”

It didn’t especially, but I said that many soldiers, all over the world, were a long way from home, and that few of them had had many real advantages in life. I said I’d thought that most people could figure that out for themselves.<sup>(3)</sup>

語り手が Esmé を諭す言葉は、Salinger が賞賛していた *The Great Gatsby* の中で、語り手 Nick の父が彼に言った言葉、“Whenever you feel like criticizing any one, ... just remember that all the people in this world haven’t had the advantages that you’ve had.”<sup>(4)</sup> を連想させ、この物語の語り手が、Nick 同様に寛容の態度を主張していることが理解される。それは、Fidelian Burke 氏が“a sympathetic, if still ironic, tolerance”<sup>(5)</sup> と呼んだ、この物語の語り手の特徴的性質であり、人々の愚かさや欠陥を許し、それぞれの人のよい部分でその人を評価し、愛そうとする姿勢である。

しかし Nick が、寛容を主張するや否やその限界を認めるように、世の中には救いがたいほど身勝手な人々がいるものである。この物語の語り手も、アメリカ兵の野蛮な行為が知的に見えるかと聞かれて、一応、見えないことを認めているからには、自分の主張の限界に気付いているに違いない。しかし、それでも兵士を責めることは不当であると、語り手は主張し続ける。同様に、彼のもとに送られてきた手紙から、語り手の妻や義母がどうしようもなく利己的であることが明白になるときも、語り手は彼女達を責める直接的な批判は避けているし、彼女達に自分の立場を訴えることも決してしない。つまり、この物語の語り手は Nick 同様に寛容の態度の限界を認めながらも、その限界に妥協することをよしとしないのである。

寛容の限界に対する、この非妥協的態度は、この物語の語り手が Nick よりはるかに潔癖であることを示す反面、Nick が陥ることのなかった欠陥を生み出している。たとえば、語り手が自分の妻を“a breathtakingly levelheaded girl”<sup>(6)</sup> と紹介するとき、そこには妻を見下した拒絶の響きがある。相手の立場を思いやり、欠点を許そうとする態度を極限まで押し進めた結果、語り手は妻の盲目さや利己主義を口に出して批判しはしない。しかし彼はまた、相手を思いやる行為が常に自分から妻への一方方向にしか作用しないことを無視することも

できないのである。そのため彼は妻の欠点を皮肉な笑いでやりすごすのだが、その態度には、素直に不満を述べあう普通の関係よりもはるかに冷たいものがある、一体なぜこんな女性と結婚したのか、なぜ今も結婚を維持しているのかと思われるほどである。

さらに、大抵の人は人に言われる前に相手の立場を考えるものだという言葉が示すように、語り手は人を思いやる心が自発的なものでなくてはならないと感じている。彼の厳格な基準によれば、説明されてから差し出された理解は、すでに思いやりとは認められない。だから、語り手は妻に対して率直に心を開くことは永久にないだろうし、妻が語り手の心を理解することも永久にないであろう。

語り手は誰よりも鋭敏な感受性を備えた心優しい人間であるようにみえるし、心と心の結びつきを切ないほど必要としている。しかし、その鋭すぎる感受性と優しすぎる性質故に、あまりにも潔癖で、あまりにも自意識が強く、かえって人との断絶を広げ、愛することを一層むずかしくしてしまっているのである。

## 2 ユーモアの限界

ところで、Esméは父親の性質を、“He had terribly penetrating eyes, for a man who was intrinsically kind.”<sup>(7)</sup>と説明している。Esméは、“intrinsically”と言うべきところを“intransically”と間違え、難しい語彙を使って背伸びしているけなげな少女の、愚かで滑稽な一面を露呈している。しかし、Salingerはこういう滑稽さの中にいつも厳しい真実を隠しているし、本質的に優しいと述べるその「本質的」という言葉で間違いが生じているので、Esméのこの誤りは、優しさの在り方そのものに欠陥が内在しているという暗示のように思える。そして、その本質的欠陥とは、内省的なEsméの父親と同じ性質の語り手自身の欠陥、すなわち、寛容の態度を完璧なまでに自分に強いるあまり、かえって非寛容の態度を招いていること、に他ならないのではないか。

Esméの父親と語り手には、他にも共通した特徴がある。ひとつは、まったく性質の違った妻と結婚していることで、もうひとつは、そういった結婚生活をユーモアのセンスで切り抜けていることである。結婚生活を日常の象徴とみなすなら、語り手達のような人々は常に無理解な人々と暮してゆかなければならないということであろう。こうした状況において、自分の孤独な心を人に見せることもできず、人々の愚かで利己的な態度を批判することもできない、鋭敏で心優しい人達は、せめて、ユーモアによって現実の厳しさを和らげたり、笑いの中に自分の本心を込めて、それとなく相手の理解を促したりして、現実を凌いでゆくより他にない。しかし、ユーモアが現実の問題を根本的に解決する手段でない以上、語り手がEsméに告げるように、ユーモアは“in a real pinch”<sup>(8)</sup>ではまったく役に立たないであろう。事実、後半の物語でStaff Sergeant Xが次第に追いつめられてゆく姿は、ユーモアの限界と無力さを実に見事に映しているのである。

Xはいくつかの激戦を経験したあと精神衰弱で入院し、最近退院したばかりである。彼の精神衰弱の直接原因は勿論激しい戦いがあったろうが、その戦いの中で彼が見たものは、殺し合っている人間が互いにごく普通の善人であるということではなかったろうか。戦後処理でXが逮捕しなくてはならなかったナチ将校の女性も、Goebbelsの誤りに気付かなかった

愚かな女性であったが、彼女の立場からすれば、国が教えたことを忠実に実行した普通の人にすぎない。“Dear God, life is hell.”<sup>(9)</sup>と本に書き込んだ彼女は、自分が正しいと教えられた世界がなぜ崩壊したのか理解できず、途方にくれた子供のようにみえるのである。

戦闘が暴露した人間の真の姿、すなわち、ごく普通の人間の中に存在する、ごく普通の、しかし冷酷極まりない性質は、John Wenke氏が、“a succinct embodiment of those very forces of insensitivity and self-justification which create and sustain the absurdity of war”<sup>(10)</sup>と評した、Xの同僚のCorporal ZやZの恋人Lorettaの性格によく反映されている。例えばZは、自分が殺されるのは冷酷だと感じられても、他の人を殺すことが同じように冷酷な行為だと考えてはいない。むしろ、戦いが終わってからも戦闘スタイルでジープを運転し、実践を経験していない兵士に優越感を抱くように、殺すか殺されるかという中で、人を殺して生き抜いたことをタフで誇れると感じている。また、Xの精神状態を“spectator’s enthusiasm”<sup>(11)</sup>でもって眺め、Xがタバコに火を点けられないのを平気で指摘する無神経さも、決して悪人ではない人間が無意識で行なっている冷酷さを暴露している。しかも、彼のこの精神的愚昧は、明るいところが好きで、何を言われても“undarkened”<sup>(12)</sup>であることから、一層救いがたい感じをもたらすのである。

このように、繊細なXと全く対象的なZは、Xの状態をLorettaに書き送り、戦場から遠く離れた平和な大学の中で、Z以上にXについて何も知らない彼女が、Xは以前から情緒不安だったに違いないと精神分析したことを伝える。Lorettaの分析はXの鋭敏な感受性をまったく理解しない一方的な決め付けで、Xの気持ちをますます傷つけるだけなので、XはZなりの心遣いを理解しながらも、ZやLorettaの愚かさに耐えられず、“Loretta’s insight into things was always a joy.”<sup>(13)</sup>と、遠回しに彼らの考えを否定する。ここでZが引き下がれば、ユーモアのセンスでもってXは困難を乗り切れたことになるのだが、あくまで自分は親切を施していると考えているZは、Xの態度に腹を立てる。するとXは突然、“Do you think you can bring yourself to take your stinking feet off my bed?”<sup>(14)</sup>と、一見まったく別の話題を持ち出すのである。

さて、Salingerの作品で足が意図的に使用されているのは、John Russell氏が指摘しているとおりで、<sup>(15)</sup>この作品でも、大切な場面毎にEsméが足を組んでいたりと、彼女の足がとてもきれいなことが指摘されていたりすることから、足は他の作品と同様に、人間の一番大切な精神部分を象徴していると言えるだろう。従って、一見話題を変えたように見えても、Xが実際に言っていることは、Zの精神はたまらないほど腐っており、人のことにとやかく口出しできるものではない、ということである。しかし、Xは直接それを相手に伝えることはできないし、ZはXの真意を理解することはない。だから、この台詞によって話題転換の糸口がつかめたようにみえても、Zはまたすぐに似たような、だかもっとXを追いつめる話を始める。

その話とは、彼らが二時間も続いた砲撃で穴の中に這い蹲っていたとき、ジープのフードの上に飛び上がった猫をZが撃ち殺したことである。Lorettaはこの行為を砲撃による“temporarily insane”<sup>(16)</sup>と診断し、Zはこの診断を信じたがっている。しかし、砲撃の中に飛び出してきた猫は、壕の中に横たわっていた兵士と同じように生きる権利を持っており、彼らと同じように無意味に、そして不合理に生命を脅かされ、そして、彼らと同じように欲

求不満になり、外に飛び出してきたと考えられる。だから、Zの行為は、自分の苦しみのために自分と同じ痛みを持つものを殺すという、まったく利己的で不条理なものである。にもかかわらず、Lorettaはそれを当然の行為とみなすので、Xは彼女の診断の見当違いなことを強調するように、“That cat was a spy. You had to take a pot shot at it.”<sup>(17)</sup>と、突拍子もないことを言い始める。Xの言葉が馬鹿げていればいるほど、そこに込められたメッセージは真剣なのであるが、物事の表面しか見えないZにはますます理解できなくなる。そしてZはついに、“Can’t you ever be *sincere*?”<sup>(18)</sup>と、Xを非難してしまうのである。

Xにとっては、間接的方法で相手が自分の誤りに気付くのを願うことが、自分の心を理解してくれない相手に対して直接できる唯一の働きかけであり、XはZに対して“*sincere*”でいようと必死の努力をしているのである。ところがZは、そんなXの切実な思いはもちろん、Xを一層追いつめていることへの責任さを感じることなく、自分は“*sincere*”であり、正しい行為をし続けていると信じている。ここに、Zの愚かさがXの頼みの綱であるユーモアの限界を越え、彼はZに対し、またZによって代表される人間の愚かさに対し、嘔吐してしまうのである。

途方もなく愚かで利己的な人間に対してユーモアが全く無力であるならば、ユーモアが最大の武器である者が、“the suffering of being unable to love”<sup>(19)</sup>とみなされる地獄にはまった場合、その状況から自力で抜け出す手段はないことになる。ところが、語り手は、物語を書いている現在においても、ユーモアに頼ってかろうじて平静な生活を維持しているにすぎない。つまり、彼は地獄を経験していたXと全然異なっておらず、もし彼が再び“a real pinch”に出くわせば、今度は永久に地獄から這い出せないかもしれないのである。

さて、後半の Staff Sergeant Xの物語において、Xの性格や戦歴、エズメからの手紙によって、語り手がXであることはあまりに明白である。しかし語り手は、“I’ve disguised myself so cunningly that even the cleverest reader will fail to recognize me.”<sup>(20)</sup>と述べて、あえてXとの距離を保とうとしている。このことについて、John Miller Jr.氏は、“But the events remain so vividly painful that the narrator must envelop them in anonymity and must remove them from himself by placing them in the third person.”<sup>(21)</sup>と説明しているが、語り手が苦しめられているのは過去の記憶だけではないだろう。二度と陥りたくない状況に対して、全く無防備、かつ無力であり、未来にその記憶が繰り返される可能性がおおいにあるからこそ、語り手はかつての自分を現在の自分に重ねることにさえ耐えられなかったに違いない。

### 3 Charles の役割

語り手が地獄を恐れる理由は、そこから抜け出せないかもしれないというだけではない。彼には、今にも現在の平穏が足元から崩れさり、地獄にはまってしまうのではないかという危機感が常にある。というのも、Charlesの性質の中に典型的なパターンとして観察されるように、愛と汚辱は紙一重であり、平穏な日常と地獄とを区別するものも、また細い一線にすぎないからである。例えば、次の一文では、Charlesが天使的な姿から悪魔的な姿へ何の予告もなく変貌する様子が実にさりげなく描かれ、二つの相反する性質の近似性を示唆してい

る。

... he closed his eyes, sleepily, angelically, then stuck out his tongue—an appendage of startling length—and gave out what in my country would have been a glorious tribute to a myopic baseball umpire.<sup>(22)</sup>

このような Charles の二面性は、彼がお気に入りの謎かけにも窺われる。“What did one wall say to the other wall?”<sup>(23)</sup>と問いかける謎は、答えの、“Meet you at the corner.”<sup>(24)</sup>から推察されるように、心と心のつながりを暗示している。この謎を、Charles は最初、片足を折って座った状態で問いかけ、相手に解けない謎を自分だけが知っている喜びで狂喜する。しかし二度目は、語り手の足を踏みつけながら問いかけ、答えを言われて憤慨する。足はここでもやはり象徴的に使用されていて、禪師の格好をして問われた最初の問いは、人の心に触れることのできる Charles の繊細な一面を示し、相手の大事な部分を踏みつけていることに気付かないで問われた二度目の問いは、同じ謎を繰り返された相手の戸惑いを思いやれない、自己中心的性質を表わしている。

相反する二つの性質の近似は、Esmé が X に宛てた手紙の最後に Charles が書き加えた“HELLO HELLO HELLO ...”<sup>(25)</sup>と続くメッセージにもほのめかされている。この追伸で Charles は自分の名前を綴り間違えているのだが、このことは、“HELLO”もまた綴り間違えられ得る可能性があったことを窺わせる。そしてもしその間違いが L と O との間に僅かに隙間を空けることだったら、心と心を結ぶ“HELLO”という単語は、“HELL O HELL O HELL O...”という、地獄でのうめき声に変わっていただろう。

## 5 Esmé の本質

愛と汚辱の差が二つのアルファベットの間空間ほどしかないということは、愛が簡単に汚辱に変わり得るとする不安をもたらすが、反面、この小さな空間を埋め、汚辱を愛に変えることは、語り手や X の無力さからも、大変難しいもののようにみえる。しかし、Charles が追伸に正しく“HELLO”と書けるように文字を教えたり、Charles との心のつながりを失ってしまった語り手のもとに、もう一度 Charles を連れ帰ってきたりする Esmé は、愚かな人々を導いて、汚辱に満ちた世界を愛に満ちた世界へ変えてゆく力を持っている。そして、この力が天賦の才として Esmé に備わっていることを、語り手は最初に彼女を見かける教会の場面で、すでに気付いているのである。

この場面で聖歌隊を指導していた婦人は、愚かな人々に教え聞かせるようなもったいぶった様子で、“to absorb the meaning of the words they sang, not just mouth them, like silly-billy parrots”<sup>(26)</sup>と、子供達に歌い方を教示する。しかし Esmé は、気がないかのようにあくびをかみ殺しながら歌っている。Esmé のこの態度のために、John Hermann 氏は彼女を“the distillation of squalor of people who are ... ‘silly-billy parrots’”<sup>(27)</sup>と誤解したのであろう。だが、Esmé の声は、“It had the best upper register, the sweetest-sounding, the surest and it automatically led the way.”<sup>(28)</sup>と描写されているように、考えていなくても、

美しい声で他の声をリードしている。従って、ここで批判されているのは指導の婦人のほうであって、Esméではない。婦人が求めているような意図した歌い方は、たとえうまく歌われたとしても、自意識や競争心を免れ得ない。Esméの美しい声が生来のもので、意図されたものでないからこそ、純粹に美しく、おのずと回りの声まで美しい方向へ導いてゆける力を備えているのである。

このような、優れた声に現われている Esmé の並外れて卓越した本質は、彼女の出自が貴族であることによっても象徴されている。貴族という制度は、紅茶を飲む習慣と同様に英国的なものであるが、野蛮な行動を取るアメリカ兵からアメリカとその汚辱を学びつつあった Esmé が、“I thought Americans despised tea.”<sup>(29)</sup>と述べるように、この物語では英国的習慣に、長い伝統と歴史で養われた精神文化が重ねられている。その上語り手は、Esméを言及するのに、“a girl”ではなく、“a young lady”<sup>(30)</sup>を使用したり、Esméと話しているうちに“a trifle posture-conscious”<sup>(31)</sup>となって姿勢を正したりしており、高潔な精神文化の粋を生まれながらに備えた少女として、Esméに深い敬意を抱いていることがわかる。

語り手はまた、Esméの“blasé eyes”<sup>(32)</sup>に気付いて、聖歌を歌いながらも聞き手を数えているに違いないと推察している。しかし、こういうさめた現実主義的一面は、James Bryanが指摘しているような、“a realist who can accept things as they are”<sup>(33)</sup>としてのものでは決してない。現実を容認しているのは、ユーモアでもって現実との直視を避け、妻の欠点を許せないにもかかわらず、結婚生活を情性的に続ける語り手の方である。Esméは、Charlesの性格を、“Sometimes he's brilliant and sometimes he's not,”<sup>(34)</sup>と評する場合も、両親の結婚が根本的には間違っていたと述べる場合も、現実を見据え、見据えた現実に関心する内なる確固とした道徳基準で判断を下し、下した判断に基づいて、物事がよりよい方向に向かうよう最善の努力を続けている。

ところで、John Antico氏は、Esméの貴族的態度や、難しい言葉を背伸びして使う大人びた傾向から、彼女を“a precocious snob and a cold, affected, and aristocratic brat”<sup>(35)</sup>と見なしている。しかし、貴族性はEsméの天性の卓越した善の性質を象徴していると考えられるし、背伸びした子供であることは、現実世界の問題点を感じることはできても、その汚辱に染まらないで天性の善を実践し続けられる状態を示しているとみなせる。実際、彼女がもっと子供であれば、Charlesのように善と悪が区別できない状態であったらうし、もっと大人であれば、語り手のようにあまりに物を理解しすぎ、行動を起こせないジレンマに陥っているかもしれない。だから、天性の善を内に持つ早熟な子であることが、EsméをEsméたらしめ、語り手を虜にしている、Esméの魅力であると言えよう。

## 6 停止した時間

未だ幼さを残す Esmé は、時に“a pretty snobbish thing to say”<sup>(36)</sup>と聞こえる判断を下してしまうかもしれないが、この幼さ故に、愛が欠けた世界に愛を作り出してゆける無限の力を持っている。この力は、愛することができない地獄から自ら這い出す力のない語り手には奇跡に思えるに違いないが、彼女が背伸びした子供でしかないことは、こうした愛の力が、子供から大人への、非常に短い過渡期にしか訪れない、束の間のものであることを示唆して

いる。

このことは Salinger の他の物語にも共通して言えることで、Esmé のように、愛を理解し、それを借しみなく与える天使のイメージを持つ者は、初期作品の Babe Gladwaller の妹の Mattie や、*The Catcher in the Rye* の Phoebe など、普通の子供以上に理解力があるが、まだ幼い少女達である。この少女達は、Babe が、“You’re a little girl. But nobody stays a little girl or a little boy long—take me, for instance.”<sup>(37)</sup> と、Matty の子供らしい愛らしさがはかなく消え去ってゆくことを予測しているように、子供から大人への過渡期の束の間の存在でしかない。それ故、喫茶店の場面で Esmé が腕にしている大きな時計を見て、語り手が、“wearing it around her waist”<sup>(38)</sup> とか何とか、冗談を言いたくなるのも、成長をあせる Esmé が、愛を作り出すことができる束の間の時を必要以上に縮めようとしているのを感じ、そんなに早く大きくなってもらいたくないと伝えたかったからではないだろうか。

さて、Esmé が腕にしていた時計は父親の形見だったが、そんな大事な品物を、Esmé は X への気遣いを示すものとして送ってくる。この時計は “shock-proof”<sup>(39)</sup> であると保証されているにもかかわらず、ガラス面が壊れており、語り手は、まだ時計が機能するかどうか確かめる勇気のないまま、長い間時計を見つめているうちに、人を愛せなかった孤独な心を和らげてくれる救いを見いだすのである。

物語の前半で、この大きすぎる時計が Esmé の早熟を示唆していたことを考えれば、後半の壊れた時計は、語り手と Esmé の関係において時が止まったままであり、Esmé は今でも愛を作り出すことができる大人びた少女のままでいることを保証しているようにみえる。つまり、“shock-proof” の時計が壊れたことは一見皮肉に見えるが、実は壊れることによって、Esmé と語り手の心を繋いだ時を、永遠にいかなるショックからも守る存在になり得ている、と考えることもできるのである。

もっとも、止まった時計によって、束の間しか存在しないと思えた Esmé の愛の力が、今も生き続けている可能性を感じられたとしても、その可能性は、壊れた時計が動くかどうか試すのをためらうほどおぼつかない。止まった時計が動き出し、孤独な心に愛を蘇らせた Esmé がもはや存在しないことが明らかになれば、語り手は自力で抜け出すことのできない地獄に再び落ち、二度と救われることはないかもしれない。しかし、あえて時計を巻かなければ、実際は変化しているかもしれない時から目をそらし、今もなおこの世界のどこかに、汚辱や孤独と戦いながら、誰もが必要としている愛を作り出す、勇気ある天使がいると信じ続けられるだろう。だから語り手は時計が動くかどうか、あえて試そうとはしないのである。

同様に、語り手が Esmé の結婚式に行かない本当の理由も、Esmé が実際は変化しているに違いないと危惧するからではないだろうか。語り手は、自分が行かないことを妻や義母のせいにしてしているが、本当に行きたければ、何らかの方法を取ったはずで、彼が挙げる理由はいかにも言い訳めいて聞こえる。それよりも、あえて時計を試してみなかったように、あえて成長した Esmé の姿を確かめないことで、かろうじて停止してみえる時を失うまいとしていると考えるほうが、ずっと道理にかなっているだろう。

このように、語り手はひたすら現実を避け、停止した時間を信じ続けようとするが、彼が努力すればするほど、現実が彼が望む姿と違うように見え、Esmé との時間は一層たよりなくもろいものを感じられてくる。しかしこの非現実的な時こそ、語り手が現実と接点を保つ



て生きて行くことを支えている希望であり、救いなのである。

## 7 愛と汚辱の物語

勇気を持って愛を作り出す Esmé のけなげな姿に支えられ、語り手は彼女のために物語を書く。その物語は、愛の欠落した地獄で苦しんでいる自分の分身を X というキスマークで表現しているように、書くことによって自分の孤独な心を打ち明け、心と心を触れ合わせてゆこうとする、語り手の愛の行為そのものであり、また、心と心が触れ合うことの大切さと、それをいたずらに切望するのではなく、自ら勇気を持って実現してゆくことの重要さを説いた、愛のメッセージでもある。従って、この物語は “to edify, to instruct”<sup>(40)</sup> を目的として書かれたと語り手が述べる時、教化の対象は Esmé ではない。教化されなければならないのは、人の心を思いやれない愚かな人々と、そんな人々に囲まれて心を閉ざしてしまった語り手のような人々である。

さらに、Salinger 自身がこの物語の語り手に似て、人々の愚かさに過敏で、隠遁の中に逃げ込まなくては生きてゆけなかったことを思うと、Salinger にとって物語ることは、彼が背を向けたように見える人々への愛の表明であり、そういう人々ともう一度心を通わせ合おうとする愛の努力なのだ、この物語は告げているようである。

## Notes

1. Warren French, *J.D. Salinger, Revisited* (Boston: Twayne Publishers, 1988), 78.
2. J. D. Salinger, “For Esmé—With Love and Squalor” in *Nine Stories* (Boston: Little, Brown and Company, 1953), 140.
3. *ibid.*, 142.
4. F.S. Fitzgerald, *The Great Gatsby* (New York: Charles Scribner's Sons, 1925), 1.
5. Brother Fidelian Burke, “Salinger's ‘Esmé’: Some Matters of Balance” in *Modern Fiction Studies*, 12 (Autumn 1966), 346.
6. J. D. Salinger, *Nine Stories*, 131.
7. *ibid.*, 148-49.
8. *ibid.*, 148.
9. *ibid.*, 159.
10. John Wenke, “Sergeant X, Esmé, and the Meaning of Words” in *Studies in Short Fiction*, 18 (Summer 1981), 243-54.
11. J. D. Salinger, *Nine Stories*, 163.
12. *ibid.*, 163.
13. *ibid.*, 166.
14. *ibid.*, 166.
15. John Russell, “Salinger's Feat” in *Modern Fiction Studies*, 12 (Autumn 1966), 299-311.
16. J. D. Salinger, *Nine Stories*, 166.
17. *ibid.*, 167.

18. *ibid.*, 167.
19. *ibid.*, 160.
20. *ibid.*, 156-57.
21. James Miller Jr., *J.D.Salinger* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1965), 22.
22. J. D. Salinger, *Nine Stories*, 147.
23. *ibid.*, 149.
24. *ibid.*, 149.
25. *ibid.*, 172.
26. *ibid.*, 135.
27. John Hermann, "J. D. Salinger: Hello Hello Hello" in *Studies in J. D. Salinger* ed. by Marvin Laser and Norman Fruman, (New York: The Odyssey Press, 1963), 255.
28. J. D. Salinger, *Nine Stories*, 136.
29. *ibid.*, 139.
30. *ibid.*, 136-39.
31. *ibid.*, 142.
32. *ibid.*, 136.
33. James Bryan, "A Reading of Salinger's 'For Esmé'" in *Criticism*, 9 (Summer 1967), 286.
34. J. D. Salinger, *Nine Stories* 146.
35. John Antico, "The Parody of J. D. Salinger: Esmé and the Fat Lady Exposed" in *Modern Fiction Studies*, 12 (Autumn 1966), 327.
36. J. D. Salinger, *Nine Stories*, 142.
37. J. D. Salinger, "Last Day of the Last Furlough" in *The Saturday Evening Post*, CCXVII (15 July 1944), 62.
38. J. D. Salinger, *Nine Stories*, 144.
39. *ibid.*, 172.
40. *ibid.*, 132.